

# 夏場の成績改善を目指す

～秋に向けた管理とフェスタの新しい活用法～

今年は、西日本を中心に例年より暑い夏が予想されてきた。まだまだ暑さ本番、残暑で飼養管理が大変な地域も多い。今回は残暑の時期の飼養管理について触れるとともに、夏場対策飼料「フェスタ」の暑熱対策以外の効果も紹介する。

## ●夏の後半の飼育管理

夏の後半は天気の変化しやすく、温度差の広がりや湿度の上昇により飼育環境が悪化しがちだ。秋に産卵成績や飼養管理をすばやく通常のペースに戻すためにはこの時期の管理が重要となる。

夏の間へい死した鶏は衛生面が心配なので一刻も早く回収しよう。へい死鶏を片付ける時はケージ内羽数も調整したい。鶏を補充してケージ羽数を揃えないと、飼料摂取量や卵重、体重がばらつき、その結果強制換羽などの失敗を招く事が多い(図1)。

また、鶏舎内のクモの巣やホコリを掃除するほか、夏に故障しがちだった設備の補修も行いたい。若い鶏の鶏舎から優先して行き、良好な飼育環境を取り戻そう。

鶏舎内に残った鶏糞はワクモやハエの巣になり鶏病の原因にもなるので急いで撤去したい。夏の間に増えたワクモやトリサシダ

も産卵成績や卵質の回復を遅らせるので速やかに対策したい。

晩夏となり、夜が涼しくなってきたら集中的な換気をして鶏舎内の気温を下げ、飼料摂取を促したい。ミッドナイトフィーディング(夜間給餌)は鶏に負担をかけるので涼しくなったらやめるが、その際、夜の照明時間は4日ごとに15分間ずつ徐々に短縮し、摂取量の急な低下をさげよう。

鶏の栄養状態や体調を管理するには体重測定が有効だ。秋にかけてときどき体重を測定し徐々に増えていくようであれば良いだろう。

このほか暑さは育成にも大きな影響を与える。育成中、特に体内のさまざまな組織が発達する中すう期に猛暑によって成長が阻害された鶏は、成鶏期の産卵成績が伸びない場合がある。このような鶏群は特に成鶏期に飼料摂取を促進し、初期成績の立ち上げをフォローしたい。



## ●ヒナの管理にも「フェスタ」

全農の夏場対策飼料「フェスタ」は、いつもの飼料に加えることで暑熱ストレスを軽減する効果がある。成鶏だけではなくヒナの管理にも役立てていただきたい。

また、フェスタにはストレスにより体内で発生する有害物質(=活性酸素)を消去する働きがあるので、暑熱以外のストレスにも効果がある。当所でマリア鶏のヒナ60羽を9日齢でデビューした後、30羽にフェスタを与えて体重を調査したところ、フェスタを給与しないヒナと比べ1週間で約3g大きくなった(図2)。ポリスブラウン鶏でも同様の傾向だった。ジュリア鶏ではデビュー後3日で同様の傾向となった後、無添加区が追いつく傾向であった。デビューによるストレスがフェスタによって軽減される傾向があったといえるだろう。

効果的な夏場対策の実践は秋以降の産卵成績を改善し、良いヒナづくりは来夏の産卵成績を改善する。そのために今後も全農では有効な技術や製品を1つでも多くご紹介する事に努めていく方針だ。

# 夏季の衛生害虫対策をしよう!

～ハエ対策について考える～



夏季には衛生害虫が多く発生する傾向があり、豚舎内の衛生状態、作業効率の低下を引き起こす。その中でも農場内だけではなく近隣へも被害を及ぼす可能性のある「ハエ」の対策について紹介していく。

## ●ハエによる被害

ハエがもたらす養豚場の被害には、①疾病の伝播 ②豚・作業員へのストレス及び衛生上の問題 ③大量発生による周辺住民からの苦情などがある。特に①は豚赤痢菌やPRRSウイルス等、豚にとって重大な疾病の病原体がハエに付着して伝播する事が分かっている。ハエの移動距離は通常数100mといわれているが、大量発生した際はそれ以上に及ぶため、養豚場の密集地域では周囲の農家と協力して対策する事が必要である。

## ●ハエの発生原因と防除対策

ハエの種類・発生要因は農場によって異なるが、一般に梅雨から秋季にかけての25～30℃の気温で、湿度が高い状態で大量発生する機会が多い。そのため毎年の発生傾向を参考に発生源対策をとることが重要だ。また糞便や飼養管理の状態によってもハエの発

生量に違いがあることも報告されている(図)。ハエの防除対策には主に以下のような方法があるので、ぜひ参考にしていきたい。

### (1)物理・機械的対策

最もコストがかからず効果的な対策は、除糞、餌こぼしの掃除を行い、ハエの発生源を除去する事である。また、畜舎入り口などに防虫ネットや電撃殺虫器(写真1)を設置し、飼養エリアへハエの侵入を防いだり、粘着シートで捕獲する方法も効果的だ。

### (2)殺虫剤による対策

殺虫剤には大きく分けて幼虫対策用と成虫対策用がある(表)。

幼虫対策用は幼虫の成長を阻害するIGR※製剤が主流で、糞などの発生源に散布して使用する。

成虫殺虫剤は空間に噴霧する方法と天井や壁に薬を塗る方法がある。後者のほうが飼料に薬が混入しにくく、直接豚にもかからないため安全で、ハエが集まりやすい明るい場所や、温かい場所で行うと効果的である。またハエは芳香臭に誘引されるので、殺虫剤にワインや醸造酢、ジュース、砂糖を混ぜて設置するとより効果が得られる(写真2)。

害虫が増えるこれからの季節、ぜひ農場内のハエ対策を行い衛生的な豚舎環境維持を目指してほしい。

※ IGR：昆虫成長制御剤

**殺虫剤の種類・使用量・方法等は科学飼料研究所にご確認ください**

表. ハエのライフサイクル別 ハエ対策総合プログラム(科学飼料研究所)

薬剤の種類	ウジ (約7日間)	サナギ (約7日間)	成虫 (約15日間)
IGR製剤	ネボレックス/ シロマジン(散布)	—	—
	ラモス SG(散布)		
ベイト剤	—	—	フラッシュベイトWP(塗布、噴霧)
噴霧殺虫剤	ETB 乳剤(噴霧)	—	ETB 乳剤(噴霧)
捕虫粘着シート	—	—	マスカビ(設置)

図1. 体重のばらつきと強制換羽

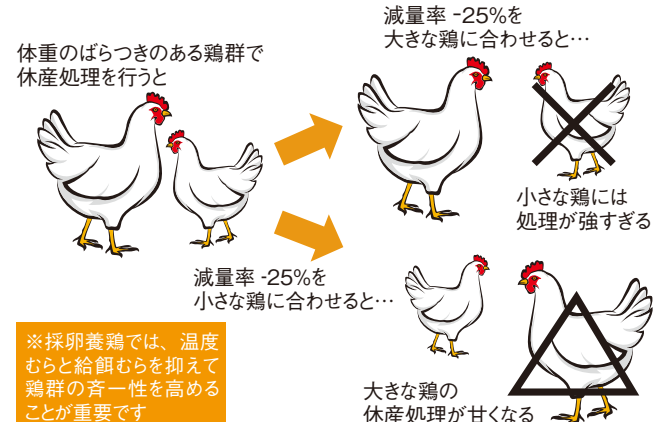


図2. マリア鶏のデビュー後の体重変化

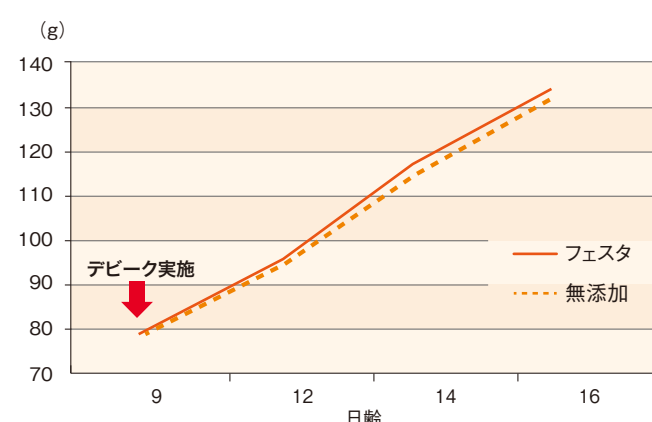
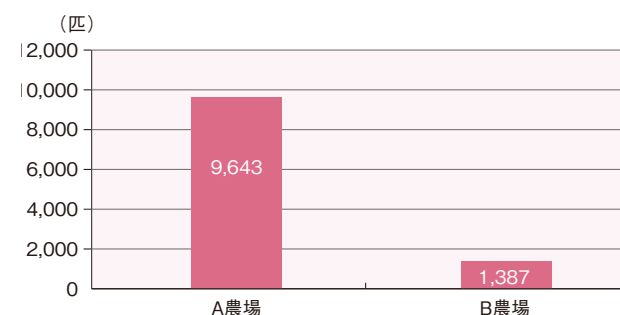


図. 飼養管理法が違う農場のハエ取りリボン1本あたりの1週間で捕獲されたハエの数



A農場……食べ残しの餌、糞を掃除していなかった農場  
B農場……毎日水洗いを行い、除糞も行ってた農場

出典：大塩行夫「家畜飼養とハエ類の発生に関する研究(4) ぶた多頭飼育農家の場合」改変

写真1.

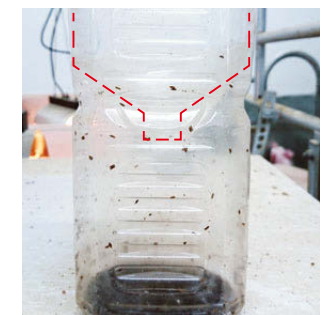


電撃殺虫器

電撃殺虫器に関するお問い合わせは、全農畜産サービス(株) TEL:03-5245-4874

薬剤に関するお問い合わせは、(株)科学飼料研究所 飼養部 TEL:027-347-3223

写真2.



誘引剤としてワインを混ぜたペットボトルハエ捕獲器。ペットボトルの上部を切り取り、逆さにしてはめて作成